

2002年2月2日

昨年9月のニューヨークテロ事件、その後米国のアフガン侵攻と続く出来事の中、TVや新聞紙上に髭の目立つこの頃である。彫りの深い中東地域の人々には髭が良く似合う。宗祖マホメッドにならって髭を蓄える習慣とのことだが、タリバーンからの開放で髭が剃れることを喜んでいる人も多いとのニュースもあった。何事も強制されれば重荷になるものと納得した。世界には髭が当たり前の社会もあれば、髭を蓄えるにはそれなりの覚悟が必要な社会もある。髭を伸ばす理由にはかなり多くの項目が挙げられそうで、“髭の文化史”のような書物があれば読んでみたいものと思うがまだ良い本を見つけていない。

大体、人類（男）が髭を剃ることを始めたのはいつごろからだろうか？ 髭剃りには相当に鋭利な刃物がなければ無理だから、石器時代の男は皆髭面のはずと思いながら復元図をながめると必ずしもそうなっていない。いつも気になることのひとつである。

男は放っておけば殆どが髭面になるはず。世界中の“髭人口”のパーセンテージは把握していないが（大体そんな統計が取られているかどうか）、多分髭は少数派と思われる。多くの男性が余計なものと思いながら自分の髭と付き合っていることになる。

したがって毎日使う髭剃りの道具はそれぞれにこだわりを持つ人が多いらしい。インターネット上を検索すると自分の髭や髭剃りの道具立てをホームページに仕立てている人の数が結構多いのに驚かされる。

自分のことを言えば、「あなたのは密度が低いけれど剃りにくい髭です」と理髪店で言われたとおり、道具には苦勞している。最近は電気カミソリの高級品を買えばシェービングクリームと水を使いながら剃れるのでそれが良さそうだと思いながらまだ実現していない。現在はおつばら2枚刃、3枚刃と宣伝が盛んな、替え刃式のカミソリを使っている。刃の枚数を増やす効能は、1枚刃も進歩しているので大差はないようにも思える。しかし、メーカーの説明を読んだり、広告のアニメーションを見たりするといかにもよく剃れそうに思えて、ついつい買ってしまう。「高いなー」と文句を言いながら使っているのだが、ある時手を滑らして2枚刃で顔を切った。小さな傷であったが見事に＝の形になっており、2枚刃の妙な“効能”を実感してしまった。便利の代償は結構高いものにつく。

海外に赴任した日本人が、童顔に見られがちなので髭を生やしたと言う話を良く聞いた。変装の基本的アイテムでもあるし、顔にかなり強烈なアクセントを与え、雰囲気、印象を変えることは確かである。髭を生やすときは変化が徐々に起こるので周りもなじみやすい。しかし逆の場合は唐突である。高校時代、ドイツ語の教師が鼻の下に髭を蓄えておりそれなりの貫禄であった。ところが夏休み明けの授業1時間目、ドアを開けて入ってきた顔にどうしたことか髭がなかった。一瞬、虚を突かれて静まり返った中、すかさず「あっ、先生がウムラウトを忘れた！」と叫んだのがいた。高校生らしい軽妙なギャグで、妙に愛嬌のある表情になってしまった教師の顔と、どっと笑い転げたクラスの雰囲気を今でも鮮明に覚えている。夏休み明けの頃のけだるさとともに思い出す出来事である。